

牧師室から (2022.6.12)

私が眼鏡をかけることになったのは中学2年の時であった。遠くにあるものを見る時に目を細める習慣がつき、先生の板書の字が見辛くなり始めて、自分の視力が落ちたことへの自覚が生じたのだ。心配した母が眼鏡店に私を連れて行って、眼鏡を作ってもらった。数日後、その眼鏡をかけて眼鏡店から外に出て、ふっと顔を上げた瞬間、夜空の星が鮮明に見えたのを今もはっきり覚えている。星が私の方に差し込んでくるかのような不思議な感じであった。今まで星が見えない生活をしていたんだな、と少し損した気持ちにもなった。都会では周りの光や大気汚染で、星がはっきり見えることがあまりない。しかし、初めて眼鏡をかけたその時は雨上がりで、たまたま星がよく見えていたようだ。

その時から夜になると、度々夜空の星を眺める習慣がついた。そして、当時何度も読んでいた『星の王子さま』にある、王子さまのセリフを口ずさんたりしていた。「ぼくは、あの星のなかの一つに住むんだ。その一つの星の中で笑うんだ。だから、きみが夜、空をながめたら、星がみんな笑ってるように見えるだろう。すると、きみだけが、笑い上戸(じょうご)の星を見るわけさ」(内藤濯訳)。「笑い上戸の星」は呑み助が住んでいる星のことを、星の王子様は言ったことがあり、その星のことを指しているのであろう。多感な中学時代に、純粹で寂しげな姿の星の王子さまは私の心の友であった。

創世記15章5節にこのように書かれている。「神さまはアブラハムを外に連れ出して言われた。『天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。』そして言われた。『あなたの子孫はこのようになる』」。子どもがいなかったアブラハムは、夜空に広がっている無数の星を眺めながら、神さまの御言葉を思い浮かべて微笑み、希望と期待で胸がときめいていたのに違いない。アブラハムが眺めていた星を今私も見ている。

神さまはご自身がお造りになった、星や花、山や海など自然を通して話しかけられる時がある。そのゆえ、自然は拝むものではなく、創造主なる神さまの御言葉を伝えるしるしであるのだ。

ウクライナの戦場の空でもこの星は光っているのだろう。しかし、ミサイルの爆弾が飛び散る中で、そこにいる兵士や、住民たちは星を眺める余裕なんかあるはずがない。ウクライナの人々が星を眺めながら、微笑み、アブラハムのように神さまの約束に身を寄せる、その日が早く来ることを心から祈る。

(鈴木善姫牧師)